

【講評文】 8月11日（木） 13校目

「革命的☆レコンギスタ」 大垣桜高校

タイトルの「レコンギスタ」は元々スペイン語の「再征服」を示す「レコンキスタ」から派生した造語ということで、某アニメのタイトルに引っ張られた感があるのはやや残念なところですが、本来の意味である「再征服＝取り戻す」という意味でとらえれば「自分らしく生きる」「自分らしさを取り戻す」ということが、劇の大きなテーマとしてあったと感じました。

保健委員会の5人がそれぞれ、規則や親などに支配され、自分のやりたいことを制御され、学年もキャラも違う仲間とぶつかりながらも、助け合い成長していく姿がとても印象的でした。保健委員という設定については、コロナ禍の現在に絡ませていて分かりやすいという意見と、話の中に委員会としての活動があまり無かったことで、保健委員にした意味があまり感じられなかったという意見が出ました。

照明では、登場人物が一步を踏み出すきっかけとなるシーンで、ホリゾントの色を明るく変えるという工夫がされていました。そのため、自分らしく変わっていく過程を視覚的にも表現することで大切にされていると感じました。終盤に差し掛かり、3年生の2人が互いのスポットライトまで交差して歩いていくシーンでは、前を向いていく2人の心情がうまく伝わってきました。また、家のシーンでは装置を変えず、ナレーションで表現することで、暗転が無く集中が途切れずに楽しむことができました。

キャストでは、所々に聞き取りにくい言葉があったり、長い髪で表情が見えにくかったりするところがあったのが少し残念に感じられましたが、劇中に流行りの言葉が使われていて、高校生らしさがよく表現されていました。装置では、教室のドアがひとつありましたが、そのドアを使わず、横にはけていく時があり、教室がどうなっているのか混乱してしまうことがあったものの、必要な装置を無駄なく必要分だけ揃えていたことで、役者の演技に集中して観劇することができました。

それぞれの登場人物の悩みが「勉強ができない・進路の決定・外見」にまつわることなど、高校生には身近な事だったことでリアルに感じられました。また、うまくいかないことに対して、文句を言うばかりでなく、自分のやりたいことを言葉にしてまわりに伝え、仲間の個性を受けとめることの大切さがとてもよく伝わる作品でした。

大垣桜高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

（文責 各務原西高校 1年 志津野若奈）